

白金葭

2月号



平成30年2月発行 第84号

金霞定例句会案内（於て アビスタ）

定例句会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

三月十六日（金）正午～二時第一兼題：鷹化して鳩となる 春田

四月二十日前後午後一時～五時 四谷地域セを予定

五月十八日（金）正午～三時 兼題：未定

兼題句参考句三月十六日分（鷹化して鳩となる 春田）

鷹鳩と化しそんぶんにたむろせり

権未知子

鷹鳩に化して青天濁りけり

五島高資

春田より春田へ山の影つづく

松根東洋城

野の虹と春田の虹と空に合ふ

大串 章

みちのくの伊達の郡の春田かな

水原秋櫻子

春田より春田へ山の影つづく

富安風生

月例句会報（'18 / 2 / 16 10名欠3 針供養、黄梅）

光成高志

コクーンタワーより和服出て針祭る

まち針が豆腐に咲いて針供養

御朱印は綿のおばばや針供養

黄梅や沼のひかりと風の音

（二）開帳村の仏の修復成り

松村幸一

鉢で売る黄梅暗き朝市に

佐助の夕つくづく凄し針まつる

針供養して戦災の供養して

千人針のその針供養せしことも

頼りたる妻に逝かれぬ迎春花

佐藤宏之助

針供養遊女の墓を先づ拝む

太宰碑に灌ぐ津軽の寒造

地吹雪の待合室に伝言板

初句会鼻へ酸素の管通し

黄梅の下が卒塔婆返納所

吉羽多美子

黄梅のぬれて輝く雨上り

春耕や円空仏を守る村

晴天や男もまじる針供養

節分の豆に鳩きて椋鳥のきて

春めくや新しくして庭の下駄

増田陽一

春暁の妻の寝息を考後とす

磯目健二一

縄文の焦げ痕凍てて貝化石
黄梅は匂はず会ふも別るるも
皆既蝕月天心に煮凝りぬ
ボタン付け位はできて針供養
少し汚れ胸底にある残り雪

光 みち

風邪で臥す家の垣根や迎春花
黄梅の散り初め病癒えしかな
笠針の太きも立つや針供養
笠針もある山寺の針供養
沿縁の土手道に散る迎春花

武者昭七

畠屋の太き針刺す針供養
針供養帰りに覗く閻魔堂
立春の没日トマトの色をして
漱石の書斎に払子春の蠅
拝殿に磁石備へて針供養

仲本興正

無縁坂下れば春の水光り
潮騒や待春の窓の薄明
母の指一針ごとの針供養
荒海や賽の河原の六地蔵
蠟梅の匂ひが誘ふ夢十夜

飯田孝三

抽斗に母の小物や針供養
大川の細波びかり針まつり
窓に寄る西施が影や迎春花
歳月のしづかに光る黄水仙

立春の雪に羽ばたき白鳥は
飼犬死んで十年春の雪積り
黄梅や術後三年事もなく
万太郎の句歳時記になし針まつり

次郎逝き太郎の杖もつ雪まろげ

田宮敦子

一句鑑賞

光成高志
敦子

亡父にある時計・眼鏡や春彼岸

黄梅や宝登山走る子等の声

針供養。バツチワークの手提げ持ち

黄梅や子供乗らないベビーカー

黄梅やべつこう飴を持つ子供

立春やショベルローダー唸りをり

浅野正美

立春やショベルローダー唸りをり

「ブルドーザー工事現場の鬼やらふ」が誓子選の朝日に載つて喜んだ昔を思い出し掲句を選んだ。節分の翌日が立春、別に唸つてゐるわけではないが、ショベルローダーのエンジン音が高く聞こえるのは立春の季感を作者が持つてゐるからです。力強い佳句です。

多美子

節分の豆に鳩きて椋鳥のきて

節分の豆まきが済んで皆が帰つた境内の豆を啄みに鳩が来るし、椋鳥も来ます。直前の喧騒とした豆まきが止み静寂を取り戻した鎮守の森の描写です。

拝殿に磁石備へて針供養

みち

淡島堂の針供養の描写です。備えてある大きな磁石に目を止めた特異な針供養の句です。物に焦点を当てて針供養を描写してゐるのです。こぼれた針を拾う道具としての磁石、安全第一の現代思想を言ひ得てゐます。

黄梅の下が卒塔婆返納所

宏之助

春の夜や藤村賣貞の炉を守る（小説）
ボール蹴る少年ゆさぶる冬の山
こんぺいとう買ひし男や針納め

倉田紀子

此やこの広葉打つたり春の雪

淡島堂着物姿で針供養
雪の道ペンギン散歩人の垣
亡き人が育てた黄梅蓄もつ
小雪舞う頬まで露天湯に浸かる
御仏が見守る堂に針供養

婆に共鳴しているように思います。

荒海や賽の河原の六地蔵

昭七

この句は、荒海や佐渡に横たふ天の川の地上版と云える佳句だと思います。舌頭に千轉すれば段々内包する精神世界が髣髴とします。荒海の上五から日本海の冬怒涛が浮かび上り、或いは天の川のかかる秋の日本海が思い浮びます。賽の河原は、親に先だつて亡くなつた子供が石積みの苦を受ける三途の川の手前にある河原。子供は親のために石を積み上げて塔を作ろうとするが、地獄の鬼がやつてきてそれを崩していき、子供はまた一から石を積み上げる。その報われない努力を救うのが地蔵菩薩です。六地蔵の廻りに小さい地蔵が無数に立つてゐる賽の河原の光景は凄まじいものであるが、子供の魂を救済する六地蔵に焦点を当てた句の切の鋭さは、加賀の潜戸の光景からの発想という作句の弁をどうに越えています。

一句鑑賞

磯田健二

宏之助

針供養遊女の墓を先づ拝む

縫い針など持つたこともない遊女と、市井の平凡な女たちの針供養という取り合わせの面白さ。かつての色街近辺にある寺で當まれた針供養。参道途中に薄幸の遊女の合葬墓があつて、それにまづ手を合わせてから本堂の針供養へ行くのである。芭蕉と一つ家に寝た漂泊の遊女

なら口が襪襷を綴る針も携えていたかも知れないが、遊郭の女は日常裁縫などとは無縁だ。その点で針供養をする女たちとは全く生き方が異なる。句にはあの世とこの世、死者と生者の対比もあって、一抹の哀切さが漂つ。頼りたる妻に逝かれぬ迎春花 幸一

春に先駆けて咲く黄梅の花を毎年妻と眺めては、一年の夢を語り、互いに力にし寄り添つて生きてきた。今年も黄梅は咲いたが、何十年間も共に春を迎えた、その妻はこの世を去つて居ない。迎春花の明るさが、残された者の深い喪失感を際立つたものにしている。

抽斗に母の小物や針供養

興正

絶えて開けて見ることもなかつた抽斗から亡き母が日常手にしていた種々のものが出てきた。そのなかに裁縫の道具もあつて、それを愛用した生前の立ち居のさまが思ひ浮かんでくる。折から針供養が寺で催されている。亡き母の遺した針の針供養を済ませ、あわせて亡母の冥福を祈りたいと思い立つのである。

千人針のその針供養せしことも 幸一

戦争が身辺日常にあつた頃、街頭で愛国婦人会の白擡を掛けた婦人たちが道行く人々に赤糸の縫い玉を白布に点綴してくれるこことを願つた。そうして完成した赤い布は敵弾から身を護る神通力があると信じられ、應召して

戦地へ向かう夫や兄弟、隣人に贈られた。銃後のひとびとが一針ごとに兵士の武運長久の祈つた、その針を供養したことでも遙か遠い時代にはあつたのである。

黄梅や沼のひかりと風の音

無縁坂下れば春の水光り

先の句は早春の手賀沼を望む坂の風景。後者は鷗外の

「雁」で有名な池之端の無縁坂から見る不忍池の眺め。

どちらも前方に春色の光る水の広がりがある。鮮やかな黄梅の花、そよ吹く風の音を聞き、天地の日のひかりを全身で体感しつつ裏道っぽい坂を下つて行く。早春の瑞氣が満ちた印象派の絵画を觀るような句である。

黄梅は匂はず会ふも別るるも

陽一

古来、水のように淡淡とした交わりこそ望ましいとさ

れてきた。梅の馥郁と香ると異なり、同じころ咲く黄梅の花は全く匂わず淡淡と咲く。その黄梅のもとで逢い別れる若く恋。会うは別れの初め、黄梅下の会者定離こそ淡淡として、しかも長く忘れ難いものであつた。

一句鑑賞

千人針のその針供養せしことも

幸一

「針供養」の兼題で「千人針」が出てくるところ、この句座にある年輪を感じる。戦中、「大日本婦人会」などと櫻にした婦人たちが街頭に立つて道行く人に白布に赤

い糸で結び目を一つづつ作らせた。戦場の兵士が身に着ければ弾除けになるという、千人の祈りを込めたいじらしいお守りは効いたであろうか。供養のこころに戦死した兵士への祈りもこめられているようである。

高志

昭七

まち針が豆腐に咲いて針供養

高志

太宰碑に灌ぐ津軽の寒造

宏之助

若年の津島修治は故郷金木の旧家ではさぞ困り者であつたろうけれど、作家が故郷に抱いた愛憎は深くそれゆえの名作も多い。文豪に数えられた後は郷土最大の誇りであろう。掲句の作者はそのような感慨と読者の愛で特に地元産の寒造りを選んで餞したという。

飼犬死んで十年春の雪積もり

孝三

ペットを失うのは身内の死と同じように悲しみを残すものらしい。もう十年にもなるのか、と愛犬の思い出を心に浮かべながら春の雪は降り続く。

漱石の書齋に払子春の蠅

みち

晩年を暮した早稲田南町の「漱石山房」跡に復元されているそうである。そこで大きな「払子」が目についた。参禅した寺からのものか、和洋漢の書籍を背にした漱石と払子の取り合はせは異様でとても面白い。「春の蠅」が決定的で、蠅を払う文豪の髭が浮かぶ。

増田陽一

みち

無縁坂下れば春の水光り

昭七

坂を下りて行くと不忍池に水が光り、ああ春だなと思う。もう「雁」は帰つたか、などいろいろのことを連想もさせる。「下れば春の・・・」と語調が好くていかにも季節を感じさせる。

一句鑑賞

少し汚れ胸底にある残り雪

武者昭七
陽一

胸底にわだかまる「少し汚れた思い」とは青春の日の名残りのそれである。それは中也の「よごれちまつた悲しみ」にも似ていようか。残りの雪はなかなかに消えがたいものである。

黄梅は匂はず会ふも別るるも

健二

出会つたのも別れたのも黄梅の花のさかりの時期。しかしはたして黄梅は匂つていたのだろうか。あのひとのにおいだけが回想をよぎる。二句ともに青春の日のかたみとみた。

黄梅の散り初め病愈えしかな

興正

病の癒えた日それを見届けたように庭先の黄梅が散り出した。自分を慰め続けた黄梅だけにもつと咲いていてほしいと願うのに。上の句に親しき者との惜別のおもいが滲む。

漱石の書齋に払子春の蠅

みち

払子は禪僧が湧きあがる煩惱を払いのけるのに使つたという仮具。漱石も山房の隅に置いて愛用したものか。作者はその大きさに驚いたという。煩惱のかわりにうるさい春の蠅をおいたところが俳諧か。

千人針のその針供養せしことも

幸一

千人針を縫つたその針。その針の供養をしたこともあるというのである。戦場に赴く兵士がそれを身につければ弾にあたらぬという呪的な民間信仰があつた。しかし兵士は帰らず千人針を縫つたその針だけが残つたのだ。繰り返してはならぬ悲劇である。

窓に寄る西施が影や迎春花

宏之助

窓近くに咲く迎春花にふと絶世の美女西施の影を見たのである。芭蕉は雨に濡れるねぶの花に西施のおもかげをみたけれど作者の見た西施はいかなる影のぬしやら。地吹雪や待合室に伝言板

吹き荒れる吹雪のなかの小さな駅舎。使い古した伝言板だけがいまだにかたことと鳴る僻村の冬だ。そんな景色もいまはなつかしい。

一句鑑賞
千人針のその針供養せしことも

幸一

「千人針」はかつて出征兵士の弾除けの御守。結「せ

しことも」の胸懐がすべて。一読、目頭をおさえる。「千人針」の主は「自身」。今に矍鑠、大正生れの老婦還兵。方々駆け廻つてしつらえた千人針を征く息子の肌身につけさせた母の心情に泣くのである。“そうだ、「その針」もこうして供養したに違いない”破調、敢えて豊む「の」～「の」の措辞に、切々、亡母追慕の息が籠る。

春耕や円空仏を守る村

多美子

冒頭「春耕」が輝く、「や」が働く、鉈彫りの円空仏を祀る村である。「守る」が贍。「春耕」と相響き、春耕満ちる村の佇まいをありありと目に見せ、かたがた村人の心情を語るのでだ。春耕は機械力頼み、耕耘機の空を白い雲がゆく。若者の減った村の野面は明るく、そして物さびしい。

漱石の墓前に払子春の蠅

みち

漱石山房探訪の吟行句。書斎の棚の払子に目を止めた

立坐の詠。「払子」はもと印度で蚊や蠅を払うのに使つた

具とか、日本では禪僧が持つ煩惱を払つ標識。頭痛もちの文豪にふさわしい取合せだ、面白い。一句の調べは明るく巧まぬ俳諧を奏てる。「春の蠅」が絶妙の座り。

ボタン付け位はできて針供養

陽一

昨今は小学男子も教室で雑巾を縫わされたりする。男子厨房に立たぬ時代に育つたってボタン付けぐらいはや

れる。だが掲句は、それをいうのではない、男混りの当世風針祭を詠むのでもない。悦子夫人を亡くされ、ボタン付けなんかで、今更、針を手にするにつけ在りし日のあれこれが目に浮かぶのである。「針供養」は悦子さんへの悼みにも繋がるだろう。残された男の心情を秘める一句である。

一句鑑賞

光 みち

雪の道ベンギン散步人の垣

正美

旭川動物園に行かれたとのことです。ベンギンの散歩という行進が有名で観光客がそれを目当てに行くとか。ベンギンのお出ましに人垣ができる、人声が聞えてきそうですね。ベンギンはモーニング姿で皆胸を張つて短い脚で歩く姿にはユーモアがあつて観客は皆目を細めます。色々想像できてそれだけで十分楽しい句です。

俳窓評論纂

*2.12の朝日俳壇自然詠は以下の4句、薄氷の山湖を風の鳴り渡る ☆考える人の隣の雪だるま 天空をあまねく統べる寒の月 なおも雪募りて昏るる山の町 ☆マークは大串草、長谷川櫂の共選。この句は佳句だ。

*姉から送られた中国新聞福山版1.16、1.17、1.20に井伏鱒二とあると①②④が載つた。古里の旧友との交流や書

簡が紹介された記事。高田類三さんへの書簡は一六二通
つづいて。即ち、最も古い見つけだ。(第二回二二二) 手の小窓つ

ゴリラ冬日象形文字を頭に詰めて
枯蓮に鴨の混みあふ日暮かな

失恋時の痛手も告白していく「内面を語らない作家」の若き日の記述を専門家は驚きをもつて受け止めた。高田さんは歌人であったが、鱈二に一首も見せたことがない。鱈二が二三歳であった一九二一年に早稲田大を休学して因島に身を寄せた。翌年上京するも復学かなわず退学、翌年に「幽閉」を発表、その六年後の三二歳に「山椒魚」を発表。因島での苦悩の日々が後の文豪の出発点となつたとか。「黒い雨」は神石高原町に疎開中に出会った重松

二句目のプロコフィエフはロシアの作曲家であり、ピアノ協奏曲が有名である。この曲をよくお聴きになつた証である。人は違うが、ラフマニノフのピアノ曲を還暦を自祝してリサイタルを開いた三菱の陸奥五郎さんを赤坂まで聴きに行つたことを思い出した。私は何が何だかわからなかつたが、連れて行つたちるさんは大分間違つていたよ、美輪明宏が来ていたよ、と言つた。むしろこれに驚いたことを覚えている。これは蛇足です。

受贈誌（平成30年2月号）

(彩139号) 平野ひろし
寒戻りことに照葉樹林帶
限界集落季に季に水手

限界集落春よ春よと水奔

雉子喰くかはたれ時を切（巣毛毛）（三）

躍り出、磯の白波春満月(川)

葉に軽く白き涙痕等の露

ト」に雨脛湯し紅葉山

野良仕事一臘の場所石踏の花(リ)

大部屋の穴伸きめ息寥の雨(リ)

力部屋の分但ため息冬の雨(リ)

セ、先に光りあへぬし垂光かた。(東京)2月

熊楠の粘菌も冬のう、きかな
白蟲。プロコフイエフの羽ばた

白鳩アロエアフイエアの羽はたきす
ここに生れ寝藁引き摺るごりらの仔

春雪やはりりと剥けし茹で卵

(リ)

電柱を狙ふひとりの雪合戦

(リ)

早春の社に呼ぶ声ちよつと来い

(リ)

紅梅や漆黒甲冑へと映ゆる

(リ)

石仏の趺坐する膝に花齊(リ)

こだま

冬波の白の浮き立つゴツホの絵

(彩139号)

光成高志

手術室吾を覗きつマスクの目(リ)

リ

賢治童話 注文の多い料理店

武者昭七

二人の若い紳士が狩猟に出かけるところからこの物語ははじまります。「すっかりイギリスの兵隊のかたたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで白熊のような犬を二匹つれて」という格好です。イギリスの兵隊の恰好も、ぴかぴかする猟銃も白熊のような獵犬も当時急速に数をましてきた都会の金持ち階級のステイタスシンボルです。

二人は「専門の猟師」(マタギでしょうか)をやどつて深い山に入り込み鳥獸をしとめて楽しんでいるのです。一方の「猟師」の恰好は「蓑あんた帽子」にささやかな「団子」の弁当という古風ないでたちでその落差は歎然としています。ぼくには「なめとこ山の熊」の小十郎が浮んできます。楽しみのために生き物を狩るという無益な殺

理佳江

武子

晴夫

万世遊

文男

生をおかす人間と、殺したくもない生き物(彼らのあいだには友情さえつうじあつてゐるのです)をこころならずもころさなければ暮らしのたたないというなんといふ落差のおきさ。それが紳士と猟師、都会と地方の当時の実状です。入り込んだ山が「あんまりものすごい」ので二匹の犬は泡を吐いて死んでしまいますが、愛犬の死さえも一人にとつては経済的損失のたかでしかないという非情さです。ふたりは損失の額をきそいあうのです。そのとき風が吹いてきてあたりの草木がざわざわとなります。風は賢治の場合、異空間(異界)からの不気味な信号です。

二人はそれに気づきません。現実を超えた世界(幻想世界)が二人を取り囮みだしてゐるのです。二人は急に空腹を覚えてうしろをふりかえると一軒の立派な「西洋造り」の家がありました。腹の空いている一人はいぶかしく思ひながらも中に入ります。そこが山猫の待ち構えている「注文の多い料理店」だったのです。山猫の狙いは山の侵略者である都會の紳士を西洋料理に仕立て上げて食べてしまふ事でした。そこが山猫の待ち構えている「注文の多い料理店」だったのです。部屋の扉にはいろいろと細かな注文が書いてあります。が、二人は自分に都合のいい勝手な解釈をしてどんどん中へすすんでいきます。気づいたのは「すぐたべられます」という言葉を見た時です。「すぐ

食べられる」のは二人の腹におさまるはずの西洋料理ではなくて、実はなんと自分たちだったのです。うしろには山猫の青い目玉がのぞいています。「さあさあ、なかにおはいりなさい」とせきたてます。「おなか」は部屋の「中」ではなくて山猫の「お腹」の意味です。「二人は泣いて泣いて泣いて泣いてなきました」と賢治は書きます。ひどい錯乱ぶりです。このへんは一番愉快な部分です。

二人を救つたのは突然飛び込んできたあの白熊のような犬です。死んだのははずの犬が生き返つて山猫に挑みかかるなんて現実にはありえない話ですがここにはあるいは賢治の死生観もからんでいるのかもしれません。賢治の幻想世界（異空間）では生と死とはいつも通じ合つているのです。あるいは深い山の靈気が白熊のような犬にふたたび生氣をふきこんだのかかもしれません。また風がどうと吹いてきて気がつくと室は煙のように消え一人は寒さに震えて草の中に立つていました。異空間の消滅です。見れば上着や財布や靴はあっちこっちの枝にかかつて揺れています。一人は幻想世界からまた現実世界に投げ返されたのです。専門の獵師も戻つてきて一緒に「団子」を食べ二人は途中で十円だけ山鳥を買って東京へ帰りました。得たものは団子と十円の山鳥とはなんとも皮肉なことです。東京へ帰つても一人の紙屑のようになつた顔

だけは元通りにはなりませんでした。自然の侵犯者としての永遠の烙印だったのでしょうか。「注文の多い料理店」は賢治の最初の童話集におさめられています。執筆は大正十年十一月、二十五歳。刊行は十三年十一月。作品の題名を本の題名に持つてくるなど賢治には愛着の深い自信作というものだったのでしょうか。虚栄に満ちた都会の近代生活とそれに浮かされた上流階級がここでは作者によつて徹底的に揶揄されているのです。（2018.01.07）

芭蕉のかるみ以後（40）

光成高志

鉄くろがねの弓タケ取猛いでき世よに出よ

角

前句の豪石な雰圍気を受けて鉄くろがねの大弓タケを引くほどの弓取がこの猛き世に出でよと転じた。弓取は無論武士のことで、元龜天正から百年、島原の乱から四十年後の天下泰平の世であったが、それに物足らぬ氣質は残つていたのである。

虎フトロ懷ヤドに妊ヤドるあかつき

蕉

虎が懷にみこもつた夢を見た曉。その虎のようない弓取をみこもつたのだという付句。山月記の虎は人が虎になつた話でこれとは違つ。

山寒しづるく四睡とこの床ベッドをふくあらし

角

豊干禪師、虎と共に睡り、傍に寒山拾得また睡る図に題いて四睡
という。蓋し天地静寂、禪界の妙悟証空の帰着を示したもの。つまり禪の窮極の悟りを表している。前句の虎を受けているし、山寒く
は寒山を利かせた季語となつてゐる。ふくあらしは「龍吟雲起 虎
嘯風生(周易 龍吟すれば雲起こり虎嘯けば風生ず)」の禪語から常
識的に出てくる言葉だ。

うづみ火消て指の 灯

きえ
ともしび

精舎の中を歩くのにダツバマラブツタが指に灯をともして修行
者の床をしつらえたという下りがある。「仏教説話大系」の釈尊の
弟子達の項に見られる文章。既にうづみ火も消えた深夜に指に灯を
灯して僧が修行をしている。四睡画の懸つた床をふくあらしの中で
も指に灯をともして修行をしている山僧もいると付けた芭蕉の心
持を想像する。

下司后 朝をねたみ月を閉

ゲス
きささあした
とう

角

下司后というのは、布衣を来た庶民の女性がたゞ美貌のゆえに後
宮に召されたという意味を「寸俗世の言葉を借りて作った基角の
言葉であろう。朝になるのをねたみ月光を遮つているという情景で
ある。後朝を基角流に解釈したのだ。源氏物語は目をふれていないと
らしい。

蕉

あはれ

哀いかに宮城野のぼた吹凋るらん

シホ

宮城野と言えば、萩の名所で、鴨長明の「無名抄」に書かれて
いる。これによれば、歌人として知られた橋為仲が陸奥守の任を終え
て京へ戻るときに、宮城野の萩を12個の長櫃に収めて持ち帰った
ところ、大勢の人がその土産を見るため、二条の大路に集まつたと
いう。萩の歌枕となつてゐる宮城野の萩が吹き凋れるというあわれ
をぼたという食べものがあやにくさに響かせた。歌枕の宮城野のぼ
たという雅俗の対比が綾と西瓜の対比に呼応しているのだ。

角

みちのくの夷しらぬ石臼

エゾ

角

みちのくのえぞはぼたを石臼で搗くのを知らぬだろう。それがあ
わいいかにといふのである。頼朝に「みちのくのいはでしのぶはえ
ぞしらぬかきつくしてよつぼのいしづみ」という慈円への返歌を踏
まえてできた付句である。陸奥みちのくの岩手や信夫しのぶではありませ
んが、思つてることをいわずに我慢していけるあなたの心は、わ

西瓜を綾に包ムあやにく

全

当時西瓜は下賤の食べものであり、後の食べるようなものではない
が、庶民出の后が人目を憚つて綾に包んで持つて来させたが、形
や重さで西瓜ということがすぐわかつてしまい、おあいにくさまと
いうところ。

たしにはわかりません。思つてはいることはすつかり書き尽くしていく
ださい。壷の碑いしまならぬお手紙で、という掛詞が巧みであり、
頼朝と慈円はこれがきっかけでウマが合つたとや。

武士の鎧の丸寐まくらかす

蕉

これは分かりやすい武士の句。みちのくの夷征伐の戦陣で
鎧のままごろ寝をしている武士に夷の娘がそつと枕をあてがつて
やる。石臼も知らぬ夷にも人の情けはあるというものといふ
で前句を受ける。

八声の駒の雪を告つゝ

角

朔北の軍營の夜明けの景を以て応したものという。思ひかねこ
ゆる関路に夜をふかみ八声の鳥に音をぞそへつる（千載和歌集 十
五恋 前中納言雅頬）という歌もある如く曉を告げる鶴の声は詩歌
によく読まってきた。ここでは軍營であるから駒と受け、駒の嘶き
が雪を告げるというのである。

詩あきんど花を貪ル酒債哉

サカテ

全

名残の花の座である、前句の雪を落花の雪と見立てて、発句の年
を花に変えただけであるが、発句に比べればはるかに自然な発想で
ある。花に浮かれて酒債のかさむのもかまわず放浪する吟遊詩人の
姿を描いて自ずから前句に見合つてゐる。近代では山頭火だ。

春湖日暮て鶯レ興吟

芭蕉

芭蕉も負けず脇句の形式を置き換えて基角に付き合つたもの。き
らきら春光に光る湖面も日暮れて興に乗つた楽しい貴殿との吟詠
もいいでお終いになるのだなあ。

以上の両吟歌仙でもつてこの虚穂はしめくくられる。
芭蕉の跋文はその後に続く。

お便り広場（到着順、敬称略）

寒中お見舞い申し上げます。記録的な寒波が到来して
いますが、お元気ですか。私方変わりなく過ごしております。
この度、ハガキ句七〇報を送つていただき有難う
ございました。楽しく見させてもらいました。「白金葭」
もいただき読んでいます。最近、子どもが使っていた学
校の副読本「要解小倉百人一首」を見つけ、少しづつ読
んでいます。当時の古人のことばや表現を通して感情を
理解すればと思っています。これからも寒い日が続きます。
ご自愛ください。

128昇

雪が降るみたいで寒いですね。腰や風邪は大丈夫ですか？七五歳以上の車の運転が危険とテレビでみて、心配しています。車返納は無理ですよね。どうぞタクシー使つたり電車使つたりして下さい。ps 東京駅ナカで流行の

バターサンド食べてね。

(1.28 ちる)

凍つた雪の上を渡つて来る風の冷たさと裏腹に日ざしはもう春のような日々ながら、もう一度雪の予報もあり、一度で結構と思つております。一月号白金霞がありがとうございます。○朝日俳壇賞の自然詠についての評論僭越ながら私も感ずるところあります。みち様の「歯固め」を存知のこととするめの足をひとつに、「歯固め」を存知のこと嬉しくなりました。それこそ一つづつ消えてゆく言葉を知らない人の多い中、さすが俳人と敬服です。○ハガキ句七〇報 賀状できれいに上手に編集され中央の新年詠歌しく拝見いたしました。○朝日新聞紙上の読者の投稿で「白樺派の文人らの集つた縁多い街」で我孫子認識が進みました。中でも杉村楚人冠邸が残つていると云うことによき日にとっても好きだった杉村楚人冠の文章を今思い出せなくなりましたが、嬉しくなりました。その頃は徳富蘆花の自然と人生、漱石の虞美人草等々読みふけりました。今老いて読書力もおとろえましたが、藤村の詩、晶子の詩、自然と人生の一こま覚えているものもありです(時々口ずさむ)。我孫子すばらしいところなのです。戦争中に軍隊があり、召集された人に面会するために電車の窓から乗つて我孫子に行つたことがあります。同行した人も今は忘れましたが、それが私のアビコの記

憶です。

長屋璃子一〇一八一月二十九日

「白金霞」一月号拝掌しました。我孫子のほうでそんな縁があつたとは驚きですね。木村さんの親戚でしようとございます。「山川草木」にそのよう感動して頂けるとは師匠冥利に尽きます。今年は格別な寒さですので高志さん、みちさん共々自愛のうえ御健吟下さい。近作 江川太郎左衛門邸 寒むや寒む土間の火の臭煤の臭

(1.31 ひろし)

しばらく失礼しています。お変りありませんか。暦の上では春を迎えたがまだしばらくは寒い日が続きそうですね。ですが梅のつぼみがほころび始め我家の蠟梅も黄色い花を咲かせていました。季節の変化を感じながら春のスタートだと感じます。白金霞正月号受けとりました。ありがとう。皆さんほんとに良い句を寄せられていますね。わたしなぞ出る幕もなさそうです。私は元気で年を越しましたがもう一月になつてしまつた。高志の体調はいかがですか。あまり無理せずに心にゆとりをもつて暮らして下さい。敏子さんに宜しく。

この寒さ向いの山の色変り

(2.7 健三)

お母様へ 少しですが、ぽんかんと安納芋を送ります。気温が低くてまだ体にこたえますが、あと一ヶ月がんばって下さい。私もがんばります。

(2.8 ちる)

高志おじさん敏子おばさんお元気ですか。ぼくは毎日

仕事をがんばっています。瀬戸田の蜜柑と八朔を買つた

のではがどりません。

(12) 璃子

ので少しですが食べて下さい。今年は特に寒いので風邪引かないようにして下さい。また会いましょう。(2月) 伸朗
きびしい寒さが毎日続きます。お元気ですか? 私は元氣で何かと忙しくしています。家事もゆっくりでないと出来なくなり一日々々があつと云う間に過ぎていきます。二月四日に新春弾き初め会民謡の先生の会の友達にさそわれて行きました。去年の五月頃から公民館に民謡を習いに行くようになりました。私はそんな場所に行き感動しました。皆様ほんとうにがんばっていらっしゃるのを見て同じ人生であんなに楽しく自分の好きな事をしながらそれも一生、ただ生活に追われて生きるのも一生・でも私も元気でその場所に居られた事に感謝しながら一日楽しく過ごしました。三味線の音に尺八鳴物ほんとうに日本人には合う音ですね。お身体に気をつけて下さい。急ぎましたので乱筆乱文ごめんなさい。みかん伸明が会社のお付合いで買った物です。

(21) 幸季

一月六日の我孫子新木のスタンプのあるお便り頂いてから何かと日が過ぎたことでしょう。とにかく様々のことをしなければならず言いわけがましく申し上げることも憚れますので、お札も遅くなりましたこと、お詫び申し上げます。(中略) 何もせず、お気に入りの書を読んで過ごせると云う事はなく、日常の女仕事の間々に句を作り会報を作り予期せぬ来訪者長電話などトシヨリのくせに三十六時間あればと思いつゝ就寝は十二時が日常生活時間の使い方の下手さに呆れております。小山さんはとにかくあのような会報でお読みになれるかどうか、ご家族迷惑かとも思いつゝお送りしています。病気はこれないです。光成様も何かガラス細工のようで良い医療でこわれたり傷つかず美しく光つて頂きたく念じております。おしゃべりおめまだるい」とお許し下さいませ。ごきげんよう。

(21) 璃子

すこしづゝ春らしくなつてまいりました。庭の紅梅満開、白い方はこれからです。みち様から法隆寺のおみやげやら、本のこびーを頂きありがとうございます。確定申告作り終えましたら、手紙差し上げるつもり、よろしくお願ひ申します。何をするにも日常生活の主婦仕事がある

右のとおり二月の鑑賞駄文をお届けします。何卒よろしくお願ひいたします。余寒どころか真冬を凌ぐ滅多に

ない寒さがつづきます。呉々も御夫妻御身お大切に、御健吟下さい。

(2.19 孝三)

我孫子日記

1/24	SOA3
1/27	浄名院
1/30	更新試験
1/31	SOA4
2/3	陽一宅
2/4	公民館
2/7	SOA5
2/8	正受院
*	2/10 薬師堂
*2	2/14 SOA6
	2/16 例会

*針供養果てて針抜く一つづゝ

針供養綿のおばばの幟立て

*2御開帳村人守る神将像

開帳や薬師三尊十二將

みち
高志

みち
高志

受贈図書・黒田杏子論・松村幸一 寂聴さんとともに②の

コピー十四枚（幸一さんより）漢詩調の新風『虚栗』暉峻

康隆著のコピー十八枚他日本古典文学大系三冊穎原退蔵著作集（健一さんより）芭蕉諸文山口誓子著昭和廿二年富士書房（宏之助さんより）銀河鉄道の夜探検ブック畠山博文

芸春秋（昭七さんより）

編集後記

投稿をメール添付ファイルやUSBで頂けるようになりまして、編集が楽になりました。更にメールでは郵送費が要りませんので節約も出来、なにより速い。どうかこの方法を試してみて下さい。文明の利器のアレルギーは気を変えれ

ば治ります。通信会社の宣伝をするわけではありませんが、現実の世の中の裏にインターネットという仮想空間が存在しているのです。古人の及びもつかない世界が存在するのが現代であります。ユビキタスという言葉がそのことを表しています。西行芭蕉蕪村一茶など歌人俳人が旅をするのは、精神と実在との邂逅を目指したものでしよう。ものと記憶との対面・対話を求め思索を深めたのでしよう。現代は先の仮想空間でもつて居ながらにしてそのものに対面できるのです。既成観念にとらわれない自由な思想が開かれている現代をまことにありがたいと思います。そういうふうに思うようになりました。

白金霞2月号（通巻第八四号）平成三十年一月二十一日発行

編集・发行人 光成高志 発行所 二七〇・一一一九 我孫子市南新木一四一七

✉ fax ○四一七一八七一〇六八

表紙の題字・加納綾女 同写真は平成二十三年一月四日のお台場の白金霞